

地名は是等から起つたのであるといふが、信ずることはできぬ。

アナミツホ 穴水保 承久三年注進の能登國田數目録には、鹿島郡に『大屋庄内穴水保、四十九町一段七、文治九年立券狀』とある。こゝにいふ穴水保は、後世の鳳至郡穴水附近であらう。

アナミヅマチ 穴水町 金澤の町名で、一番丁から五番丁まである。元は長氏の下屋敷の内、上家中と呼んだ地であるが、明治四年四月戸籍編成の際この町名を立てた。長氏の祖先が鳳至郡穴水に居て繁榮したから、それに因んだのである。

アナムシガハ 穴虫川 江沼郡大聖寺領生水ヶ谷から出で、城下の穴虫から關町に至り、越前町の北を流れ、中町の西に至つて北に流れ、熊坂川に注ぐ。

アナザキカンエモン 姉崎勘右衛門 前田利家の臣で、府中衆といはれるもの、一人である。

アナザキゴザエモン 姉崎五左衛門 發父貞右衛門武眞の祿百石を襲ぎ、御持弓足輕指南役となり、後五十石を増し、文政十一年十二月廿四日致仕して如休と號し、料十五人扶持を受け、天保五年歿した。

アナザキシロザエモン 姉崎四郎左衛門 尾張荒子に於いて前田利家に仕へ、子孫相繼いで藩に仕へた。

アハガサキ 粟ヶ崎 石川郡鞍月庄に屬する部落。源平盛衰記壽永二年の條に見える袴崎で、延寶の繪圖に橋栗ヶ崎とある。元祿十五年橋栗ヶ崎を改めて粟ヶ崎とした。こゝから河北郡粟ヶ崎・大根布等の諸村を通過し

て、遂に能登街道に連絡する。藩政時代の宮藤木屋藤右衛門は、この橋栗ヶ崎の住人であつた。

アハガサキオウカン 粟ヶ崎往還 金澤から淺野川の左岸に添うて、石川郡粟ヶ崎に赴く道路をいふ。その堤防には槻並木を植ゑ、下草に笹を付けてあつたが、今は昔の跡を見ぬ。

アハガサキカタ 粟ヶ崎湯 河北湯の流末で、石川郡粟ヶ崎村寄りの所をいふのであるが、金澤では河北湯全部の意に用ひることもある。

アハガサキガハ 粟ヶ崎川 ↓オホノガハ大野川。

アハガサキテイ 粟ヶ崎亭 石川郡粟ヶ崎に在つて、寛文十年前田綱紀の築造せしめた所であり、木下順庵・平岩仙桂等を召して雅會を開いたこともある。『百尺凌雲碧玉樓。蒼波涵影鏡中流。帝機數流江天色。織出樞前錦樹秋。』といふのも綱紀のこゝでの作である。亭の大きさは八十餘坪、別に鷹部屋・番所等があり、その外圍東南四十間、西南六十間、西北・東北五十間餘を有し、前に古川・新川の二橋があつた。貞享元年にはまた列松を植ゑしめ、文化十一年には境域を擴大する等のことがある。一に粟ヶ崎御旅屋とも呼ばれてゐた。

アハガサキパン 粟ヶ崎橋 河北湯の下流、石川郡粟ヶ崎と北間の間に架する。義經記に、『かどの國宮腰に出で、大野の渡し給ひて、あがさきの橋をこえて云々。』とある。あがさきは後の粟ヶ崎であるが、今の大野川の水脈では、濱街道を行くに粟ヶ崎の橋を超え

る必要はない。思ふに義經記の考へ違であらう。

アハガサキハチマングウ 粟ヶ崎八幡宮 石川郡粟ヶ崎に鎮座する。社記に明徳二年勸請。寛文十年こゝに藩侯の御旅屋が營まれた時、その屋敷となつた爲一町許傍に移され、社殿・鳥居を建て、苗松二百株を植付けられたとある。

アハガサキミチノキ 粟ヶ崎道記 一冊。前田重晴が尙庶子であつた時、寛延元年六月十八日兄重熙の粟ヶ崎出遊に従つた紀行で、當時重晴は十四歳であつた。

アハガラバシ 粟穀橋 金澤橋梁記に、『粟がら橋、觀音町入口也』とある。今その名がない。

アハグラ 粟蔵 鳳至郡下町野郷に屬する部落。元祿の郷村名義抄に、粟蔵氏の百姓が居るから粟蔵村といふとある。

アハグラシラヤマシヤ 粟蔵白山社 鳳至郡粟蔵に鎮座する。文政の社帳には白山姫大明神とする。明治中町野神社と改めた。

アハグラノヒコノジョウ 粟蔵の彦丞 鳳至郡粟蔵の人。天正中畠山氏の諸將の請を容れて之を助け、黒瀨長興市景連の勢力に反抗したから、前田利家入國の後その功を賞せられた。同十年十月持高の中一町六反の扶助を受けた。次いで十一年九月十一日當村繩打之内河原田分壹町六反大十五歩の扶持に改められ、十六年九月晦日には高に直して五十俵となつた。また彦丞の長子彦十郎は別に利家に召出され、知行百四十俵を受け、後に増して二百七十俵となつた。これを以て次男が家

を繼ぐ筈であつたが病死したから、利家は彦十郎に暇を賜うて相續せしめた。三代彦左衛門・四代彦三郎相受け、常に十村の職を奉じた。

アハジマジンジャ 粟島神社 江沼郡中津原に鎮座する。式内等舊社記に、『粟島神社。中津原村鎮座。祭神少彦名命。舊社也。』とある。今この地に粟島社があるのがそれであらう。

アハダシンホ 粟田新保 石川郡富樫庄に屬する部落。龜尾記に、この村にぬさかけ松といふ古木のあることを載せてゐる。

アハツ 粟津 能美郡粟津郷に屬する部落。源平盛衰記安元三年二月白山神興振の條に、『同十日金劔宮を出し奉てあはつ着せ給ふ。』と見える。

アハツ 粟津 鳳至郡比良に屬する小字。元來粟津村であつたが、元和六年檢地の際南治左衛門といふ肝煎が家名を村名と書違へた爲に爾後南村となり、承應二年村御印下賜の際粟津村に復した。然るに正保・寛文の高辻帳には南村とあつて、凡べて村名は高辻帳の通に調ふべきことを命ぜられたるを以て、延寶三年以來南村とし、元祿十五年十二月更に御算用場から粟津村とすることを命ぜられた。能登名跡志に、『粟津村は寺家村續き也。是に昔三崎權現三千石の社領の時に在りし大宮司やしきとてあり。又御鹽藏等屋舖の内にあり。又琴江院とて臨濟の禪宗あり。露地見物也。』とある。

アハツオンセン 粟津温泉 能美郡粟津に在る。天正八年撰の蓮如物語に、『蓮如上人の